

船井情報科学振興財団奨学生レポート/第九回

2023年7月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

早いもので、留学に行ってからもう4年が経とうとしている。留学に行く前もまた4年ほど日本の大学院にいたので、合わせると少なくともこの8年くらいは経済学の研究がどうか、論文がどうかそんなことばかり考えて過ごしていたことになる。そしてもちろん、自分の論文が高く評価されることを期待しながら、少しでも「良い論文」が書けるように頑張ってきたわけである。それは自己満足のためでも世のため人のためでもあるけれど、それと同じくらいに良い評価の論文が書けないと目先の生活費の金額や雑務の量に響くとか、就職先が見つからないとか、そんなアカデミア社会で生き残るための卑近な理由のためでもある。それは今も変わらないし、何なら来学期にアカデミアでの就職活動を控える自分にとって今は後者の理由の方が大事になってしまっているのかもしれない。

ここで難しいのは、論文を書く理由ごとに評価されるべき相手が異なるということである。自己満足のために論文を書くなら、論文の評価者はもちろん自分ひとりのみである。もし世のため人のために論文を書くなら、その論文評価するのは当然「世間」になるだろう。もうちょっと具体的に言えば、例えば日本の政策についての論文を書けば日本の政治家なりあるいは国民がなるほど面白い、役に立つと思うかどうかで評価が決まりそうだし、アメリカの政策について書けば同様にアメリカの政治家や国民が主な評価者ということになりそうである。そして、もしアカデミアでご飯を食べることが目標であれば、究極的には同業者が人事面接などそういうものを取り仕切っているわけなので評価者は「同業者」ということになる。そして、経済学界限では定評ある国際ジャーナルの大半はアメリカ人ないしアメリカの大学の学者によって占められているので、ここでの「同業者」は「アメリカの同業者」の評価と言い換えてもそこまで差支えないかもしれない。

今の経済学業界には、この「同業者」の評価と「世間」の評価を結び付けるものが少ない気がする。これは特に筆者のように、研究対象が非アメリカの応用研究であると顕著である。もし研究対象がアメリカであれば、「アメリカの同業者」はアメリカ人ないしアメリカ永住者であり、アメリカという世間の一部でもあるケースが多い。であれば、同業者としての感性で論文を評価してもアメリカの世間一般の評価との乖離は比較的小さくて済みそうである。しかし、アメリカの同業者がポーランドの世間の感性を持っていると期待しても良いだろうか？日本の世間の感性は持ち合わせているだろうか？

「社会の役に立つ研究をみなさい」という風に色々な方に教わってきたし、ここまで4年間の留学生活で少しはそういう研究ができるようになってきた気がしている。また、論文の自己満足という意味でも、昔より満足できてきている気がする。ただ私自身が日本人で自分が内在化している社会というのはそういう日本の世間であり、だからこそ自己満足できている側面が強いようにも思う。翻ってアメリカに留学して就職活動をしようというとき、自分が一番気にするよう期待されているのはアメリカの同業者の評価である。そして自分も、自分の中の世間も、そしてアメリカの同業者も、全ての評価軸で高評価される研究者になるのは非常に難しいことだと痛感している。

かつて有名な経済学者が「世間は学者にお金と時間を渡すことで、自分が本当なら知りたいけれど自分ではではできないような面倒かつ膨大な調べ物をしてほしいと思っている」といった趣旨の事を言っ

たことがあるらしい。¹個人的にはそういう世間の期待に応えられるような学者になりたいと思っている。しかし同時に学者が職業としての学者であるためには同業者の評価を気にしなければならないし、自分に一切の業界での金銭欲や名誉欲がないなどと聖人君子を嘯くつもりもない。そして、同業者は必ずしも世間と同じように評価してくれない。こういう時に何を一番気にして自分のキャリアを選ぶのが良いのだろうか？大学院が自分の論文執筆能力などの研究者として活躍するための能力を磨くことに注力するステージだとすると、(もちろん生涯勉強という側面があるとはいえ) それには一応の終着点が見えてきた。次は自分の能力のどう活かすか、つまり自分がどの評価軸の下で生きていくのかを選ばないといけないように思うし、そしてそれこそ自分の生き様を選んでいく、ということである気がするのである。

¹ピケティであったような気がするのだが記憶が曖昧で思い出せず、もしかしたら記憶違いかもしれない。もし出典をご存じの方がいたらぜひお知らせください。